

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成30年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：30.8.29(水)

開催場所：愛媛大学

どうも皆さん、こんにちは。

夏の暑い盛り、大学生、どういう生活をしているかそれぞれだと思いますけど、貴重な時間を「愛顔でトーク」に参加することに割いていただきましてありがとうございます。

先々週、地元の高校生とこうした会をやり、昨日は今年の4月、新しく県庁に加わった23歳ぐらいの職員と討論会をやってきましたんですけど、今日は現役の大学生ということで、それぞれの立場の違い、また年齢の違いでいろいろな意見を聞けるということで、大変楽しみにしています。

【平成30年7月豪雨災害】

県の仕事というのは非常に多岐にわたっておりまして、防災や減災という人の安全・安心を守る仕事。あるいは地域を元気にしようという活性化に向けた経済政策。あるいは福祉の充実を図るための保健・福祉関係。さらには次世代を担っていく子どもたちを育てていく教育分野。さらには環境をテーマにしたフィールドや観光振興等々。それを同時並行して行っていくのが県庁の仕事ですけども、今日は本来でしたら愛媛県全体の魅力をまた皆さんに伝える機会になるかと思っています。それは質問等々のやりとりの中でお答えさせていただきたいと思っています。というのは、今年は今、特別な事情が発生してしまっていて、県庁もその対策に集中的に取り組んでいる最中なので、ぜひそれを伝えさせていただきたいと思っています。

それは7月、夏休みに入る前に突如襲ってきた西日本豪雨災害であります。これは松山にいたとなかなか実感がわかないかもしれませんが、愛媛県下では大変な被害が出てしまっていて、恐らく長いところについては5年、6年という月日をかけて復興に入っていくかざるを得ない、そんな傷跡を残した豪雨災害でありました。

【地球温暖化と集中豪雨】

特に近年、地球の温暖化が進んで気象状況が大きく変わってきているのではないかということが言われています。例えば、昨日もおとといも東京ではゲリラ豪雨が発生。また、この夏休みは38度、40度と考えられないような猛暑が続く。これは僕の子ども時代には全く想定していなかった状況であります。こう考えているのは、地球の温暖化が原因ではないかというんですが、それが証明されているわけではありません。ただ実際に、100年前と現代社会、地球全体の平均気温を比較しますと、全体で平均気温が1度上昇していると言われています。今後、また100年経つと、何も手を打たなければ4度以上の上昇があるのではないかという予測が出されています。その上昇の原因というのは、科学技術の進歩、そしてそれに伴う生活スタイルの変化。こういったものがじわじわと地球の環境をゆがめていくことにつながったということであろうと言われています。

特に、温暖化というのは石油文明というものと関係が深いのではないかとされているんですが。例えば、環境問題というのは1970年代ぐらいに公害という、工場から出る排気ガスといったものを通じて病気が拡大したという。公害というところから目が向けられるようになりました。1980年代に入ってきますと極点におけるオゾン層の破壊。オゾン層が破壊されると生物を死滅させる紫外線のある周波が地球上に届くということで、生命の危機につながるのではないかとということで注目を浴びました。

そして1980年代後半になってきますと温暖化、酸性雨といったものがテーマになってきたんですけども、特に温暖化については、簡単にいえば地球の表面に二酸化炭素が排出されて膜ができる。その膜ができたことによって、地球の表面はビニールハウスの中にあるような環境になってしまう。放熱されるエネルギーが中に閉じこもりますから、その結果として気温が上昇する。平均気温が1度上昇するとはいえ、あくまでも平均であって細分化して分析しますと、赤道近辺はほとんど変わらない。そのしわ寄せは極点にいくということになりますから、北極、南極についてはそれ以上に上がっている。100年前と今日に至っては、100年の間にそれだけ極点が上がると、当然のことながら氷がとける。さっき申し上げたようにもう100年経って、何も手を打たなかったらさらに3度から4度上昇しますので、こうなってくるとさらに氷がとけて、その結果、海面が上昇する。海面が上昇するということは陸地部が減っていく。陸地部が減っていくということは食料をつくる耕作地が激減する。食料危機にもやがてはつながっていくというようなことから、何とかしようじゃないかということで今、世界各国が対応に苦慮している状況になっています。ちょっと話が外れましたが、このような背景があって、集中豪雨というものも、あるいはゲリラ豪雨というものもかつてと比べると発生しやすい状況が生まれました。

今回、7月に襲ってきた集中豪雨というのは、全く想定されていなかった気象状況が起こったからにはほかありません。大雨を降らせる低気圧が長時間にわたって動かない。1カ所に留まるという現象が起こったわけでありまして。今、日本全体の年間降雨量というのはだいたい1,800ミリ。365日で1,800ミリと言われてはいますが、今回愛媛県を襲った集中豪雨はたった4日で500ミリを超えました。1年間が1,800ミリ。今回、4日で500ミリ。その雨量の多さというのは想像がつくのではないかと思います。となると、これまで引き起こされたことのなかった土砂崩れが発生する。また、河川が氾濫するといったことが現実化したわけでありまして。

【県内各地の被害状況】

残念ながら、ここしばらくでは経験のない大きな被害に見舞われまして、亡くなられた方は愛媛県内だけでも27名になりました。家屋の床上浸水、床下浸水は5,000戸くらいの方々が対象になっています。今なお家がない、戻れない方々、避難生活を続けざるを得ない方々が300人以上という状況になっています。こういうことはこれからも南海トラフ地震等々の可能性もありますから、大きな災害というのはいつ、どこに、どのような形で襲ってくるかは全く予測不可能であります。

【復旧の第一ステージ 4つの目標】

だとするならば、今回の豪雨災害等々の経験を次に生かしていくということも重要なテーマになってまいります。こういうとき何をするかを明確に共有できるかが本当に勝負だと思っておりますけれども、愛媛県の場合、今回、第一ステージで4つの目標を掲げました。

【人命救助】

1つは言うまでもなく人命救助であります。これは消防関係の皆さん、警察関係者、自衛隊等々の方々が来る日も来る日も暑さの中、捜索活動を続けてくれています。例えば、河川に人が流れたという情報があったんですけどなかなか見つからない。一番最後に見つかった方は、1カ月後ぐらいでしたが、その間、警察のアクアリング部隊が肱川という河川を30キロにわたって水面下に潜って捜索活動を続けてくれました。最後に見つかったのは高知県の河川のところでしたが、30日間、見えないところでいろいろな方々が懸命な捜索活動を展開してくれていました。これが第一段階、人命救助です。

【避難所の設営】

第二段階。第一段階のもう1つのテーマは避難所の設営であります。これだけの大規模な被害になりますと、当初、避難所に来られた方が2,000人ぐらいいらっしゃったと思いますが、それぞれ地域ごとに学校であるとか、公民館であるとか、場所は決めています。食料を調達する。今回は特に暑い日が続くのでクーラーをどう調達するか。さらには、生活必需品。ティッシュペーパーであるとか、本当に日常に使うような薬であるとか、こういったものも調達しなければならない。さらにはメンタルのフォローをするために臨床心理の先生や、さらには子どもたちのことを考えないといけないので養護教員の先生方。こういった方々が避難所ごとに配置されて、それぞれきめ細かいフォローをするということも大事なテーマでありました。

【水の確保】

そしてその避難所が設営されますと、今回特殊な事情があって対応に追われたのが水の確保でありました。

水というのは、我々にとっては蛇口をひねれば無料で出るものと思っている方が多いと思うんですけど、宇和島市では、今回、その源である浄水場が土砂崩れで完全に埋まってしまったわけでありまして。こうなるともう打つ手がありません。水を出したくても供給ができない。今回、約1カ月間にわたって1滴の水も蛇口をひねっても出ないという世帯が5,000世帯以上、1万人以上に上りました。当たり前前かが当たり前でなくなったときにどういうことが起こるのかということのをまざまざと見せつけられた思いがします。

単に水が出ないという想像ではなくて、いろいろなところで膨らませていってもらいたいのですが、飲料水は全国から大変だねっということでペットボトルとかいろいろ送ってくれますから何とかあります。全国の各自治体にもお願いしまして、それぞれの自治体が持っている給水車。自衛隊も持っていますから。給水車を愛媛に送ってほしいという依頼をして、すさまじい数の給水車が来てくれました。それぞれ地区ごとに配置して、住民の皆さんに給水車を通じての水の供給体制を組んだということが7月の段階であります。

飲料水はペットボトルと給水車で何とかあったんですけど、水が出ないとどんなことが起こるかといいますと、まずトイレが流せません。全く流せないんです。ですから、この対策が大変になります。それから洗濯ができません。これ全く何もできない状況になります。それから、お風呂に入れません。水が出てこそのお風呂であって、水がなければ、健康で文化的な生活の基盤が崩れるということになります。最後にもう1つが掃除ができません。浸水被害を受けて、床上浸水になった家。この片付けをするためには水の清掃が必要になります。水の清掃をしないと消毒活動ができません。場合によっては、本当にひや

ひやはしていたんですけれども、暑さが続いていたので一步間違えると感染症が発生し、拡大する恐れがあると。

ですから、今回は水をどうやって確保するかという特殊事情が大きな壁として立ちほだかりました。被害を受けた吉田浄水場に行ってみますと完全に埋まっていたから、土砂をのけて建て直すということになりますと、数年かかるという状況でした。数年もこんな生活を人に強いるということにはできないということになります。何かいい方法はないか。当初、全く気付かなかったんですが、知恵というのは出てくるものであります。ろ過機。大きな大きな、水をろ過する装置と、それを動かす電気。配電盤。さらにはそれを送っていくポンプ。この3つがそろえば、ほかのところから水を取ってきて、給水ができるのではないかということが分かってきました。

【三間、吉田地区の給水体制の実現と通水式及び開栓式】

しかし、問題はその中核をなす大型のろ過機であります。この大型のろ過機を今からメーカーに注文してつくってもらうとなると数カ月かかるということでありました。再び、我々の前に壁が立ちふさがります。どこかにないのかな。探してみれば出てくるものであります。2年後、東京オリンピックが開催されます。その東京オリンピックのカヌースラローム競技を行うためのろ過機というものが東京都がオリンピック向けに発注して完成していたものがメーカーの在庫としてあることが分かりました。茨城の工場にあるらしい。これは人命優先ということで東京都にお願いいたしました。2年あるからオリンピックは何とかなるでしょうということで、東京都は快く完成していたオリンピック用のろ過機を愛媛県に譲渡するというので、救いの手を差し伸べていただきました。

ところが、ろ過機は確保できたけど持って来ようと思ったらあまりにでかくて普通の道路が通れません。愛媛に持ってくるんだったら茨城を出発点にして各都道府県ごとに通行許可証の申請をし、その許可を取ってもらわないと車の上に載せられない。それをいちいち取っていると1カ月以上かかることが分かってきました。そんな悠長なことは言っていない。こういうときに頼りになるのは全国組織を持つ自衛隊と警察であります。その窮状を申し上げまして、自衛隊と警察がプランを立ててくれました。特殊車両で正味2日で宇和島の吉田町まで、ばかでかい大型のろ過機を持ってきてくれました。

あとは各メーカー、配電盤メーカーとポンプメーカーに急を要するというので最優先事項として扱っていただきまして、8月5日、ちょうど被災から1カ月足らずで御家庭に通水できたということになります。蛇口をひねって水が出たときの地元住民の皆さんの歓声、水遊びに興じる子どもたちの笑顔というのが自分自身にとっても忘れ得ぬ風景でありました。

【住居環境の整備】

こうして、ようやく人命救助、避難所の設営、水が整いまして、今、最後の住宅の整備に入っています。これは仮設住宅を建てて家が壊れてしまった方々の2年間という限定になります。住んでいただく、復興に向けての活動拠点として提供するために要望を聞いて今、200戸近い仮設住宅の建設に入っています。今週中に完成予定でありまして、順次引き渡しをし、今避難所生活を送られている方々が仮設住宅に入居するというので、9月の下旬ぐらいにはこの作業が完了しますので、ようやくこれで第一ステージが終わることになります。

【1次産業の被害状況と本格的な復興】

しかし、これはあくまでも応急の対策であって、復興ということになりますと長い年月がかかります。特に今回、愛媛県に深い爪痕を残したのは、1次産業被害であります。農業、林業、漁業。特に大きかったのは農業、そして林業であります。この1次産業の被害額は愛媛県1県だけで今回の西日本豪雨災害、たった3日の雨で550億円というとてつもない金額になりました。道路や橋、こういった方面の被害も300億円、400億円とされていますから、すさまじい金額の被害がたった3日の集中豪雨で発生したことになります。

特に深刻なのが愛媛を代表する産業、かんきつ農業であります。

南のほうに行きますと、のみで山をめぐり倒したような風景が目に見え込んでくると思います。園地ごとに細かい分析をしなければなりません。多少のてこ入れで来年には生産可能な農地もありました。しかし、とてもじゃないけどそれだけでは無理だと。ある程度、土地の改良をしてじっくりと育てなければ復活はできないところもありました。これは2年、3年かかると思います。

そしてえぐられるところは改良ごときでも無理だと。再編しなければとてもじゃないけどやり直すことはできないという地域もありました。こちらは土地を再編するだけで5年という月日がかかります。じゃあ、その間、農業をやっている方々がどう生きていくのか。そういったことも考えなければなりません。きめ細かく分析しながら現状復旧型、改良型、再編型。きめ細かく分析して農地の復活に向けて頑張っていかなければならないことになります。

驚いたのは、みかん農家に行くと傾斜地がありますから、そこにモノレールというみかんを運ぶレールが山中に張り巡らされていますね。もう1つあるのが、スプリンクラー。水を噴水する装置。水のほうは何とかあったんですけども、モノレールというのが今、全国にこれをつくっている会社が2社しかないんです。2社しかないですから、しかもみかん県といったら和歌山とか愛媛とか限られていますから、従業員さんも数がしれているんです。それがほとんどやられているんで、一気にやってもらいたいとお願いしても設置できる技術者がいませんと。物理的にいないということが分かりました。今、これをどうするかというのを本当に頭を痛めているところなんですけど、やっているのと1つ1ついろいろな課題が我々の前に出てきます。それらを1つ1つ解決策を知恵を絞る、お金を捻出する、将来プランを考えるということをしてしながら組み立てていくのがある意味では県の仕事でもあります。

【県の施策の3つの柱】

今日はちょっと特殊事情が発生していますので、そんなところを冒頭のお話にさせていただきましたが、ここから先は何でもオーケーですから。特に県の重要な施策は今申し上げた防災・減災対策が1つ。それからもう1つが少子高齢化に伴う人口減少対策。これは皆さんの世代は大変大きな試練になるかと思えます。この対策。それから地域を元気にしていく。活性化策。これを3本柱に位置付けて展開していますので、そういった分野でもアイデアがあったらぜひこの機会に出していただければ幸いです。

では、今日もよろしくお願いたします。